Why was Ms. Zhou Xun Picked out as a Heroine? : My Personal Comments on the Hong Kong Cinema "Hollywood ★ Hong Kong"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2004-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松村, 茂樹 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/3758

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

研究ノート：
なぜジョウ・シュン（周迅）なのか？
—『ハリウッド★ホンコン』私感

Why was Ms. Zhou Xun Picked out as a Heroine?
—My Personal Comments on the Hong Kong Cinema "Hollywood ★ Hong Kong"

松　村　茂　樹

『恋する惑星』と同じ

香港のフルーツ・チャン（陳果）監督『ハリウッド★ホンコン』（中文題：『香港有個荷里活』・2001・フランス、香港、日本）を観た。デビュー作の『メイド・イン・ホンコン』（中文題：『香港製造』・1997・香港）以来、常にセミ・ドキュメンタリー形式の映画を世に送ってきたフルーツ・チャン監督がはじめて手がけた「本質的なドラマ」[注1]ということで、期待していたが、完成度は高くなかったように思う。ただ、観客としてはともかく、分析者としてはある一点において興味をひかれた。「ああ、『恋する惑星』と同じだ」と。

もちろん、ウォン・カーウァイ（王家衛）監督『恋する惑星』（中文題：『重慶森林』・1994・香港）と『ハリウッド★ホンコン』のストーリーに似通ったところはない。だが、共に香港の映画であること、そして大陸出身の女優を起用していることでは同じだ。そう、『恋する惑星』ではフェイ・ウォン（王菲）が、『ハリウッド★ホンコン』ではジョウ・シュン（周迅）が、共に不思議な魅力のミューズとして登場しているのである。

先に結論を言おう。役柄はともかく、観者はフェイ・ウォンやジョウ・シュンが大陸中国の出身だということを知っている。よって、用意されたストーリーに、象徴的に、そして印象的に「中国」が割り込んでくるのだ。「香港」に「中国」が割り込んでくる—これこそ1997年の返還前後における香港の深層不安なのではなかろうか。この2つの香港映画は、「香港」の深層不安

を描くのに、誰もが知っている「中国」の女優を使ったのではないかと筆者は思うのだ。

「香港」のメタファー

まずは『恋する惑星』を思い返していただきたい。このストーリーに関して、ウォン・カーウァイ監督は、「香港、台湾でこの映画が封切られたとき、僕には予想外の反応が返ってきました。観客たちがこの映画をポストモダン・シネマだとか、複雑難解で暗示的な作品だと考え、個々の場面の意味を解釈しようとしたり構造を分析しようとし始めたのです。でも僕はそんなことを意図してこの映画を作ったんじゃありません。可能な限り単純でリニアに発展していく物語を語ろうとしただけです。(中略) だからけっして分析しようとか、意味を解釈しようとかしないでほしい」[注2]と述べ、「分析」や「解釈」に釘をさしている。だが、この映画には「分析」や「解釈」をさせようとしているとしか思えない「場面」が満載なのだ。

たとえば、第1話のブリジット・リン (林青霞) 扮する金髪の女や、カネシロ・タケシ (金城武) 扮する警官223が手にする1994年5月1日という缶詰の賞味期限がクローズアップされるが、これが1997年7月1日の香港返還のメタファーであることは、藤井省三氏によって指摘されている[注3]。1994年は単にこの映画が作られた年ということであろうが、5月1日はメーデーで、労働中国人民にとって重要な大会だ。また、第2話に出てくる虎のぬいぐるみが第1話でチラッと出てくる。虎は「中国」のシンボルであろう。

そして何より、警官223がバーで金髪の女に話しかける際、広東語→日本語→英語→標準語 (普通話) の順に話し、標準語でやっと金髪の女は会話に応じる。この言葉の順番は香港の歴史と見ることができる。つまり日本の占領、英領植民地再生、そして最後に標準語の国、すなわち「中国」とくっつくことになるのであるから。さすれば警官223は「香港」のメタファーであり、台湾語、広東語、日本語、英語、そして標準語を自在に操れるカネシロ・タケシにしてはじめて演じられたのかもしれないし、彼がパイン缶やサラダを腹いっぱい詰め込むのも、「西洋」を貪欲に詰め込んできた香港を象徴していると見ることもできよう。また、金髪の女は、「西洋」人に復讐を果たし、金髪のカツラを脱ぎ捨てるが、この金髪の女も「香港」のメタファーなのだろう。

「香港」と「中国」の関係

そんな「香港」のメタファー２人の物語の後を受け、第２話がはじまる。こちらは片や「香港」のメタファー、片や「中国」のメタファーだ。

「中国」メタファーは先に述べたようにフェイ・ウォン扮するフェイである。フェイ・ウォンは北京の生まれで、18歳の時に香港に移住し、歌手デビューをしたが、そもそもその時のキャッチフレーズが「北京からきた女の子」であった。このフェイがトニー・レオン（梁朝偉）扮する警官633に恋をする。警官633は香港警察の「制服」をまとうバリバリの「香港」メタファーで、ナレーションも広東語で話す。香港大学卒業で、準ミス香港の純然たる「香港」女優であるチャウ・カーリン（周嘉玲）扮するスチュワーデスの彼女にふられるが、言うまでもなくスチュワーデスも「制服」組だ。「香港」のオフィシャルたる２人が別れ、そこに「中国」たるフェイが不思議な魅力で「割り込んで」くるのである。フェイはカリフォルニア、つまり「アメリカ」に行きたがっており、警官633に「一緒に行こうよ。お金はあるわ」という。「アメリカ」に追い付き追い越すべく経済発展をしている「中国」なら言いそうなセリフだ。このラブコールに「考えとくよ」と煮え切らない警官633は「香港」そのものである。

そして「中国」たるフェイは「香港」たる警官633の部屋に侵入し、勝手に模様替えをはじめる。タオルや石鹸にはじまり、とうとう白熊のぬいぐるみを第１話でチラッと出てきた「虎」に変えてしまうのだ。映画では、警官633はこのフェイの行為に気付いていないかのような描き方をしている。そして新しい石鹸に「いつのまにこんな丸々と太った」と話しかけ、新しいタオルに「個性がなくなった」と語りかける。「中国」によって太りはするが個性がそがれることを暗示しているのか。

好きな警官633の部屋に侵入しながらも、フェイは「夢のカリフォルニア」をBGMにし、「ユナイテッド航空」の模型飛行機をもてあそぶ。心は「アメリカ」にあるのだ。そして、警官633から念願であったはずのデートに誘われても、そこにはあらわれず、「アメリカ」に行ってしまう。そして１年後、警官をやめファーストフードの店主になっている元警官633の前にあらわれた時には、スチュワーデスの「制服」をまとっているのだ。つまりオフィシャルな「中国」となっているのである。

映画では、この２人がこれからステディな関係になることを予感させる。

だが、「中国」は「制服」をまとい、「香港」は「制服」を脱いでいる。元警官633は「制服が似合うね」といい、フェイは「私服もすてきよ」という。さらにフェイが「どこに行きたい？」と聞くと、元警官633は「君の行きたい所へ」と答える。これで「中国」と「香港」の関係は決定的となるのである。

実は、この「制服」にも、前出藤井氏はすでに着目されており、「繰り返される制服の着脱行為とは、あるいはイギリス植民地主義から中国共産党への支配者の交代を示唆しているのだろうか」とも書かれている[注4]。よって、屋上屋を架す必要はないのだが、筆者がそれでもメタファー説をとりあげたのは、フェイ・ウォンという女優が演じていることにより、フェイが「中国」メタファーになっているのではないかという点を指摘しておきたかったからに他ならない。

「虎頭蛇尾」の「香港」

これと同じ構図が、『ハリウッド★ホンコン』にも見られると筆者は思うのだ。つまり、メタファーを散りばめ、その最も重要な「中国」メタファーをきわだたせるため、ジョウ・シュンを起用したのではないかと。ストーリーを追いつつ、これを検証してみたい。

舞台は、再開発を待つばかりの香港の下町であるダイホム・ビレッジ（大磡村）。そこの焼豚屋に豚のように太った主人と息子2人が生活を営んでいる。この3人は「香港」のメタファーだ。そこにあらわれるジョウ・シュン扮する上海娘は、前述のように「中国」のメタファーだ。おもしろいことに、上海娘は星条旗を思わせるタンクトップで登場し、プラザ・ハリウッドというダイホム・ビレッジの背後にそびえたつ高級マンションに住んでいる。そして仲良くなった焼豚屋の下の息子に「お姉ちゃんはアメリカに行きたいの」という。この点、『恋する惑星』のフェイと同じだ。

上海娘は焼豚屋の下の息子をなつかせ、上の息子を誘惑し、主人をとりこにする。3人とも彼女に夢中になるが、実は彼女は悪徳弁護士とつるみ、自らを16歳といつわり、未成年淫行の言いがかりをつけて金を脅し取っており、同時に、焼豚屋の近所で自分の彼女に売春をさせて暮らしているヒモ少年も脅していた。焼豚屋の主人は金を渡すが、ヒモ少年は要求された金を払わなかったため、悪徳弁護士配下のチンピラに虎の刺青をした右手を切られ

てしまう。切られた手は、焼豚屋の下の息子が見つけ、大陸出身の医者によってくっつけられるが、実はそれは蛇の刺青がなされた他人の左手だった。大陸出身の医者つまり「中国」によって、「虎」に「蛇」をつなげられたヒモ少年つまり「香港」は、「虎頭蛇尾（初めは盛んだが、終わりは振るわない）」にされてしまったわけだ。

「中国」との暗い未来

映画の中で、上海娘はずっと広東語を使っているので、観者は本当に上海から来たのかどうか、途中まではわからない。だが上海娘は、焼豚屋の従業員である大陸出身の中年女性に標準語で話しかけられた際、「あなたはどうして標準語を話すの？」と、標準語で答える。これにより、上海娘はやはり上海から来たことが窺えるのだが、広東語をあやつり、「香港」に溶け込んだ上で、混乱させ、壊滅させる上海からやってきた「中国」は、まるで麻薬である。反対に、大陸出身の中年女性従業員は、完全に「香港」に同化したメタファーとして描かれており、主人に心を寄せて迫るが、相手にされず、ついには突き飛ばされ、そのはずみで死んでしまう。「香港」に同化している「中国」を「香港」が殺すのだ。「香港」は相手にすべき「中国」を見抜けなくなっているということだろう。

だが、「中国」たる上海娘の不思議な魅力に翻弄されていた「香港」も、ついにヒモ少年が立ち上がり、肉包丁を持って上海娘を殺しに行き、上の息子もそれに従う。だが、それを下の息子が上海娘に知らせようとし、主人が阻止しようとするが、それを振り切って上海娘を逃がす。下の息子は、無邪気に「中国」を慕い続ける「香港」のメタファーなのであろう。

すんでのところで上海娘を取り逃がしたヒモ少年は、上の息子に「虎頭蛇尾」の右手を切り落としてくれと頼み、上の息子はヒモ少年が上海娘を殺すべく持ってきた肉包丁を振り下ろす。「香港」が「中国」にくっつき、「蛇尾」に成り下がった自らを「香港」自身の手で切ってしまうのである。返還から4年目に作られたこの映画には、返還前に作られた『恋する惑星』に見られる「中国」ととにかく一緒にやって行こうとする未来志向（あくまで筆者の「分析」「解釈」が前提であるが）が見られない。

映画はその後、「アメリカ」の本当のハリウッドに行った上海娘を映す。「中国」が本当に相手にするのは「アメリカ」なのであって、決して「香港」で

はない。「香港」は従属物ではあっても、パートナーではないのだ。

ただ、最後の最後で、「香港」は意気込みを示す。日常生活に戻った焼豚屋の3人は、左腕にヒモ少年の右手をつなぎ合わせた男を見かける。その刺青は当然、ヒモ少年とは逆に「蛇頭虎尾」になっているわけだ。3人はこれを見てニッと笑うが、これは「中国」から自らを切り落とした「香港」が隆盛へ向かうことの暗示であろうと思う。

「中国」メタファーたるミューズ

以上、筆者の勝手な「分析」「解釈」を展開させていただいた。監督の意図とは違っているかもしれないが、これは「私感」であり、映画がひとたび監督の手を離れ、観者にゆだねられた時、無数の「私感」が生まれる。当然、筆者にも生まれたわけだ。それをストレートに記したのがこのノートである。

筆者は、『恋する惑星』も『ハリウッド★ホンコン』も香港を描いていることには変わりがなく、テーマはやはり「香港」なのだと思う。そして1997年という香港にとっての一大事の前後に撮られた作品なれば、返還先の「中国」がディープに絡んでくるのも当然だと思うのである。よって、誰もが知っている中国出身の女優を起用することにより、「中国」のわかりやすいメタファーとすることは、映画の手法としては極めて効果的だったのではなかろうか。

そして、おそらくは『ハリウッド★ホンコン』で、その大役を果たせる女優としては、人気知名度の面からも、そして不可欠の不思議少女的キャラクターの面からも、ジョウ・シュンが最適であったと筆者も思う。『恋する惑星』のフェイ・ウォンのように。

[注]

[1] フルーツ・チャンの序言(『ハリウッド★ホンコン』プログラム・発行年未記載・メディア・スーツ、博報堂、レントラックジャパン　所収) による。

[2] 王家衛「『恋する惑星』は一種のロード・ムービーなんです」(インタビュアー：暉峻創三)(『恋する惑星』プログラム・1995・ブレノンアッシュ　所収)

[3] 藤井省三『中国映画を読む本』(1996・朝日新聞社)

[4] 同 [3]